

阪神の教訓をハイチに

ハイチで発生した大地震で国際医療救
援団体「AMDA」(本部・岡山市)は
医師、看護師ら4人を被災地に派遣、支
援活動に乗り出している。菅波茂代表
(83)は、17日に発生から15年を迎えた阪
神大震災に触れ、「大震災はAMDAが
多くのことを学んだ分岐点だった」と振
り返る。阪神での経験はハイチでどう生
かされるのか。

【聞き手・石戸諭】

AMDA代表に聞く

の念を持って接すること
が支援の要です。

同時に、「ボランティア
アの限界」も学びました。
ボランティアは万端では
なく、社会基盤の復旧、
治安の安定が効果的な活
動の前提になります。さ
らにボランティアの心構

だけをふりかざす。ごう
慢な援助」になってしま
う。理由のない親切は、
不安と警戒心を呼び起こ
します。

日本も含め統治機構の回
復支援が求められていま
す。無政府に近い状況を
ボランティアが改善する
ことはできません。

また、ハイチと阪神を
比較すれば、ボランティア
アと政府の役割が見えて
きます。阪神では、政府

ではボランティアは無
力かというところ、そうでは
ありません。ある程度、
政府が安定した後の支援
活動でこそ力を発揮する
のです。ただ、現状では
情報収集を中心に対人援
助を応急処置的にやるし
かない。復旧は長期戦で
す。現場から提案される
アイディアや情報を基に、
より効果的な援助を考え
る。これも阪神から学ん
だ教訓です。

治安回復局面で活動を



菅波茂代表

日本に広がり、「困った
時はお互い様」という相
互扶助の精神が援助の軸
になることを皆が実感し
ました。言い換えれば、
援助を受ける側のプライ

えとして、受け入れ側へ
の感謝、援助の機会を与
えてくれた人のおかげで
現場にいられることを惜
に意識する必要があるま
す。

により早期に水道や電気
などの社会基盤が復旧し
ました。一方、ハイチで
は政府自体が壊滅的な打
撃を受け、治安回復など
が不十分。そうした状況

を要するのは政府です。
これを忘れると、善意

阪神大震災では「ボラ
ンティア」という言葉が
ドを尊重し、尊敬と信頼

これを忘れると、善意

を要するのは政府です。

だ教訓です。